

●●● 病院ニュース ●●●

しろうさぎ



島根大学
SHIMANE UNIVERSITY

2013.1.1
第31号



年頭の挨拶 2013

- 小児科・小児外科外来紹介
- 整形外科外来について
- 放射線部はオレンジ色です
- 心大血管リハビリテーション科の算定ができるようになりました

- 目次 -

年頭の挨拶 2013	1P
小児科・小児外科外来紹介	1～2P
整形外科外来について	2P
放射線部はオレンジ色です	2P～3P
心大血管リハビリテーション料の算定ができるようになりました	3P
助産師外来 頑張っています！！	4P
「臓器移植を考える日」の制定と啓発活動	4P
第4ステージの移転について	5P～7P

就任挨拶	8P
ロボット支援前立腺全摘除術を始めました！	8～9P
口腔医療チーム”の配備について(医学部歯科口腔外科と島根県歯科医師会の取り組み)	9P
島根大学および島根県における放射線治療の現状と2つの提言	10P
しまね地域医療支援センターは頑張っています	11P
ヘルスサイエンスセンター島根が医療相談事業に「ミュー太」を活用	11P～12P
出雲産業フェア2012に出展しました	12P
第9回 島根大学医学部附属病院関連病院長会議を開催	13P
島根県警察と包括的連携・協力に関する協定を締結	13P
平成24年度医学部ホームカミングデー講演会を開催しました	14P

「山陰と阪神を結ぶ医療人養成プログラム(4大学プログラム)」	15P
女性医師のキャリアアップ支援に係る交換会in 神戸	
「大学病院人材養成機能強化事業」に伴う島根大学医学部	16P～17P
附属病院「地域コーディネータ会議」及び学内FD	
「平成24年度大学病院人材養成機能強化事業ステップアップ	17P～18P
研修会を開催しました」	
潰瘍性大腸炎に対する新規メサラジン製剤の有効性の検討	18P
オーストラリアからの材料部見学について	19P
“名医にQ”に出演して	19P
2012年日本内分泌学会学術総会、米国骨代謝学会学術集会	20P
における若手研究奨励賞受賞の報告	
文部科学省の平成24年度医学教育等関係業務功労者表彰について	21P
島根県初のがん看護専門看護師に合格しました	21P

平成24年度 医療安全・質向上のための国立大学間相互	22P
チェックの訪問を受けました	
中国地区DMAT連絡協議会実働訓練に参加	22P～23P
平成24年度出雲空港航空機消火救難訓練に本院DMATが参加しました	23P
平成24年度医学部消防訓練を実施しました	24P
EMS 内部監査について	24P～25P
検査部新ユニフォーム	25P
12月18日にC病棟6階で病棟のクリスマス会がありました	25P
2012年度クリスマスイルミネーションについて	26P
ナース輝いて オフも充実しています	26P
島根県病院対抗バレーボール大会に参加して	25P
搾乳でお困りの方はご利用ください！	27P
「オロチ踊りパレード」に参加しました	28P
ボランティア活動について	28P
病院運営委員会の報告	29P
研修会・講演会・学会等のお知らせ	29P
	29P～30P

あけましておめでとうございます。この3月には、ようやく病院再開発が完了します。外来棟1階のエスカレーター、売店付近は明るくなり、雰囲気も良くなっています。快適な療養環境の提供についてはほぼ達成されていますが、地方に存在していても大学病院としてのミッションを果たすために、先進的医療の提供、がん医療と急性期医療の充実、優れた地域医療人の養成は今後も継続的に進めなければなりません。まず来年度には小児専門の心臓外科医の赴任に合わせて、大幅な手術関連機器の整備を行い、当院が山陰における小児心臓外科手術の拠点となることを目指します。がん医療については、新たに設置された緩和ケア講座、稼働中の腫瘍センター病棟、緩和ケア病棟、外来化学療法室を中心とした診療により向上しており、放射線治療は病院間の治療計画ネットワークを構築する方向で検討されています。また順天堂大学医学部病理・腫瘍学講座の樋野興夫教授が始められた「がん哲学外来」を本院でも開設し、死、人間関係、社会生活等に関して患者さんが抱える悩みに向き合う場をつくらうと思っています。がんに対する手術については、3か月前に導入したロボット手術支援システム「ダ・ヴィンチ」による前立腺がんに対する前立腺全摘の症例集積が順調に進んでいます。今後は膀胱がんに対する膀胱全摘、回腸新膀胱造設術にも使用する予定で、来年度には泌尿器科医以外でも「ダ・ヴィンチ」のライセンス取得医師を増やし、外科系各領域に適応を拡大できるよう病院としても支援します。先端的医療の提供・急性期医療の拡充のため、昨年秋に各診療科、各部門を対象として医療機器整備に関するヒアリングを実施しましたが、このヒアリング結果に基づき、今後数年か



けて画像診断装置から手術器械等まで計画的に医療機器整備を行います。

病院運営につきましては、在院日数の短縮による病床の効率的な運用、手術件数の増加等、職員の皆様のご協力により昨年10月の診療費用請求額が過去最高となりました。これには同月から稼働を開始した救命救急センターで受け入れた患者さんの緊急手術が増えたことも影響していると考えられます。救命救急センターは24時間体制で県全域を対象とした救急医療を担っていますが、将来救急医療に携わる医師を育成し、マネジメント能力を有する人材の確保がこれからの課題です。継続的なセンターの稼働には全診療科の支援が必須ですので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。職員の皆様が当院の課題を共有し、多職種の方々の意見を反映した病院運営を行うために、来年度以降の病院運営の方針等について、すべての病院職員を対象とした説明会を年度内に開催しますので、是非ご出席ください。

本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

小児科・小児外科外来紹介

小児科 小林 弘典

新外来のコンセプトは、①子ども達が少しでも楽しく過ごせる場所、②小児のトータルサポートを目指した外来構成でした。子ども達が安心して、かつ楽しく待ち合いに居れるよう多くの工夫をしました。外来の診察室レイアウト、壁やベンチの色、プレイゾーンなどまで小児の特殊性を考慮したデザインとなっています。プレイルームには3m以上もあるホワイトボードを作成し、連日芸術的な落書きを見ることが出来ます。また、中高生が本を読んだり勉強もできるように机も用意されています。同じユニットに、小児外科、こころの診療部・遺伝診療部・看護相談室も配置され、それぞれの目的にあった部屋を準備しています。

夜には、正面玄関の上にやさしい明かりに照らされ

た小児科外来のカラフルなベンチなどが目に飛び込めます。機会があれば是非ご覧ください。



© Mercis bv

受付



診察室



待合室

整形外科外来について

整形外科 熊橋 伸之

昨年 9月24日から整形外科外来がリニューアルしました。新しい整形外科外来は診察室が4つ、予診室、処置室、ギプス室、運動機能検査室、補装具の作成等をする工作室、器材室がそれぞれ1つずつあり、計10室あります。外来は当院を受診される方が最初に訪れる医療部門で、窓口での対応、医師の言動、看護師の心配りなどの一つ一つが患者さんの胸に刻まれる重要な病院の顔であります。明るい配色で改築された整形外科外来は清潔感もあって、多くの患者さんに好印象を与えるデザインとレイアウトとなっています。また、整形外科外来では外傷に伴う処置、骨折に対処するギプス巻き、そして膝靭帯損傷などの膝不安定性を評価する検査や手足の感覚障害の程度をみる検査などが必要ですが、本外来ではそれぞれの処置が可能な部屋が独立して用意され、機能性にも優れた外来となっています。さらに、各診察室はプライバシーに配慮して完全個室化され、患者さんは周囲を気にすることなく診察や検査結果ならびに手術の説明が受けられるようになっています。加えて、整形外科では腰部や下肢の診察の際には着替える必要がありますが、患者更衣室は2

部屋あり診察もスムーズに行えるようになっています。

当院へ受診される患者さんが、安全にかつ安心して整形外科医療を外来で受けられるように今後も、医師、看護師、クラーク全員で力を合わせて診療に取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



受付

放射線部はオレンジ色です

放射線部 小松 明夫

放射線部は「居ながら改修」工事の真っ最中で全体の2/3が終わったところです。検査を続けながらの工事は、精密機械の並ぶ放射線部にとって「埃」と「振動」と「騒音」に悩まされることになり、実際に機器の故障や検査の中断が頻発し、心苦しくも患者さんにご迷惑をおかけすることが多くありました。そして、「居ながら改修」ですので施設の大きな変更はできませんでしたが、受付だけは診療科の窓口に合わせての改修となり大きく変わりました。色は明るいイメージのオレンジを選択しましたがいかがでしょうか(写真1)。

状態(写真2)で新旧入り乱れていますが、改修が終了する平成24年度末には床、壁そして天井の貼り替えが済んできれいになることでしょうか。また、腫瘍センター等として提供していた放射線部カンファレンス室(共用)が、6年ぶりに場所を変えながらも復帰することになり、私たちの勉強会や地域の皆様との研究会が再開できることになりました。これにより再び様々な人たちとの意思疎通が図れることは、今回の工事の中でも私たち放射線部員が最も待ち望んだことであり、今までの不便さが一気に解消されるものと期待しています。

この3年間の改修工事でリニューアルされた附属病

工事は現在も続いており、床も天井もパッチワーク

院、放射線部で気持ちも新たに最新且つ確実な技術と真心で業務に励みたいと思っています。よろしくお願

いします。



(写真1)



(写真2)

心大血管リハビリテーション料の算定ができるようになりました

リハビリテーション部では、平成24年12月1日より心大血管リハビリテーション料Ⅰの施設基準を取得し中国地方ではまだ実施施設数の少ない、「心臓リハビリテーション（心リハ）」を開始しました。「心リハ」は労作時の各種症状の改善、冠動脈事故の発生リスクの減少、生命予後の改善などのエビデンスが認められている急性期リハの主要分野の一つです。

当院での運動療法には専任の理学療法士2名（今岡圭、江草典政）が担当します。まずは循環器疾患および心臓血管外科疾患で入院中の患者さんに対して開始し徐々に外来患者さんへと拡大したいと考えております。

これまでも心大血管術後患者さんや、心疾患で入院され長期臥床となった患者さんに対して理学療法を実施していましたが、その多くは診療報酬の規定上、廃用症候群として扱ってきました。今後は術前の患者さんに対して術後合併症の発生予防を目的とした指導や、入院早期の患者さんに対して症状改善を目的とした運動療法が可能になります。

リハビリテーション部 今岡 圭、江草 典政 馬庭 壮吉

平成24年11月からは循環器内科、心臓血管外科の先生方のご協力を得て、カンファレンスにも参加させていただき、情報交換を行うとともに、ご指導いただいております。今後は、他の部門とも協力して「包括的心臓リハの実践」を目指していきたいと思いますので、ご協力のほどよろしくお願い致します。



心リハの風景



助産師外来 頑張っています！！

看護部 山本雅子

島根大学医学部附属病院の助産師外来は、妊婦健診外来・母乳&育児外来・産後1ヶ月検診外来の3つを柱に実施しています。

妊婦さんが、自身と赤ちゃんの健康管理の必要性を理解して実行できるよう、妊婦さん一人一人の生活に密着した支援を、熟練した助産師によって行っていま

す。とても和気藹々と楽しい雰囲気の話の中から、妊婦さんと助産師との信頼関係も生まれ、分娩や命を授かることへの思いも強くなっているようです。

現在、助産師独自で実施しているものは母乳外来のみですが、平成25年4月から、完全に助産師独自の妊婦健診として実施する予定です。



新人助産師
先輩の外来
勉強中 ^ ^。
勉強中

超音波技術もDrに 教わりつ
つ、腕を磨いています。



「臓器移植を考える日」の制定と啓発活動

平成22年7月17日に改正臓器移植法が全面施行され、生前に書面で臓器を提供する意思表示している場合に加え、ご本人の臓器提供の意思が不明な場合も、ご家族の承諾があれば臓器提供ができるようになりました。このため、自分の意思を尊重するためにも、日頃より臓器移植について考え、家族と話し合い、「提供する」、「提供しない」どちらかの意思表示しておくことが大切となっています。

本院では、平成24年1月24日に山陰では初となる脳死下臓器提供による腎移植手術を実施し、移植医療の取組を推進しているところであり、平成24年8月16日から入院・外来患者さんを対象とした臓器提供意思表示の確認活動を開始しました。その表示の割合の状況は、日本臓器移植ネットワークから公表されている調査結果に比べ、まだ、かなり低い状況であるため、この活動を広く患者さん・家族等の方々に周知し、ご理解をいただくため、また、意思表示の推進を図ることを目的として、毎月16日を「臓器移植を考える日」と定め

医療サービス課 患者サービス室

ました。

12月は16日が日曜日のため17日の月曜日に「臓器移植を考える日」を知らせる立看板及び脳死や臓器提供意思表示の流れなどを説明したバナーが設置された病院待合ホールで、啓発活動の一環として医療サービス課職員により来院の患者さんらに意思表示を促すカードをお配りしました。



第4ステージの移転について

病院再開発担当 渡部 晃

1月12日(土)から2月16日(日)にかけて外来・中央診療棟と病棟諸室の改修工程にあわせ第4ステージの移転がおこなわれます。

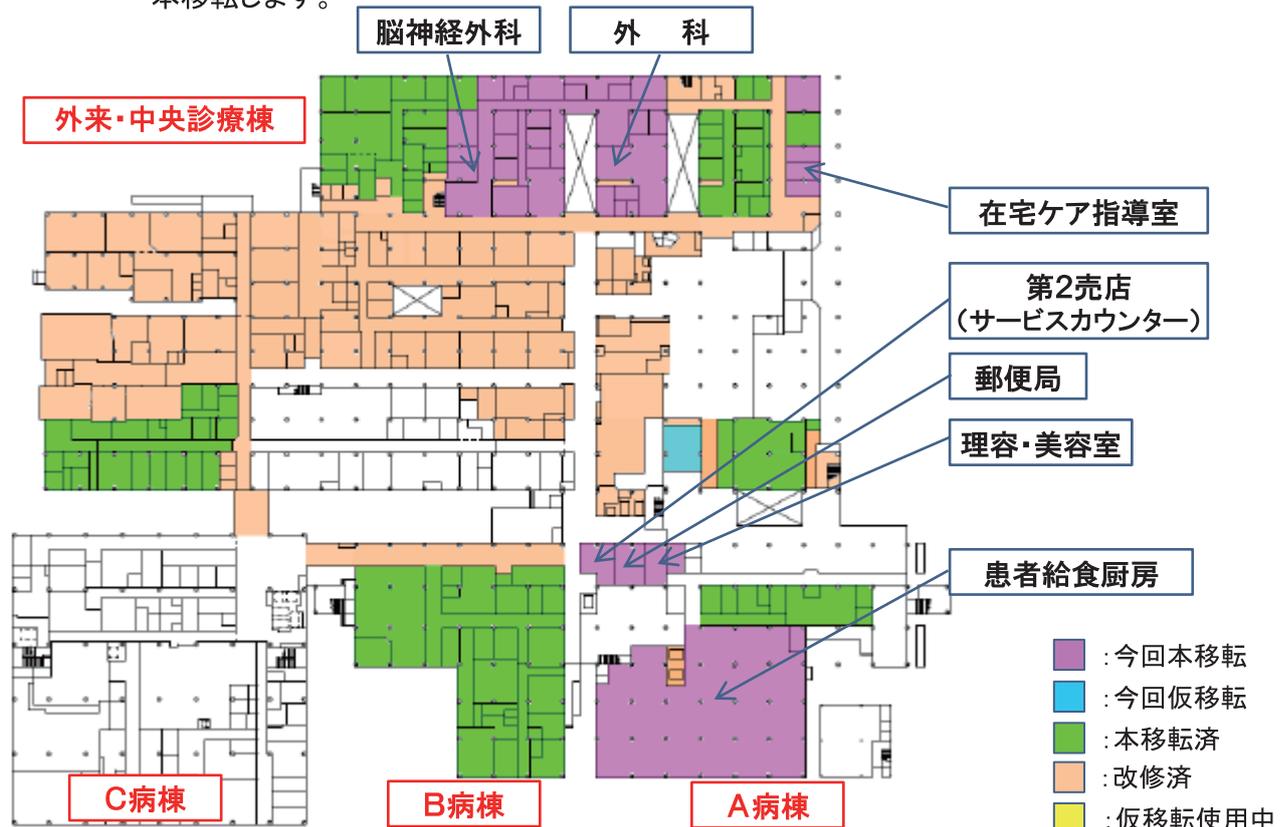
病棟2階部分廊下の改修工事も着々と進められ綺麗になった天井・壁・床が広がってきました。今回は、下記のとおり移転が行われます。

また、検査部では全改修工程10工区の内、第10工区目の居ながらの改修工事が、また、放射線部では全改修工程7工区の内、第6工区目の居ながらの改修工事が進められています。

移転月日	移転診療科・部門等	移転区分	移転先	移転元
1月12日(土)	外科外来	本移転	外来棟1F	外来棟3F
	脳神経外科外来	本移転	外来棟1F	外来棟1F
	認知症疾患医療センター 認知症外来	本移転	A病棟2F	外来棟3F
	外来栄養相談室、調理実習室	本移転	A病棟2F	外来棟2F
	がん登録室	仮移転	A病棟2F	電算棟2F
1月26日(土)	在宅ケア指導室	本移転	外来棟1F	外来棟1F
	スタッフ共通更衣室	本移転	AB病棟2F	
	郵便局	本移転	AB病棟1F	外来棟1F
	第2売店(サービスカウンター)	本移転	AB病棟1F	
1月27日(日)	患者給食厨房	本移転	A病棟1F厨房	旧薬剤部跡仮厨房
2月16日(土)	理容・美容室	本移転	AB病棟1F	外来棟2F

病院 1F

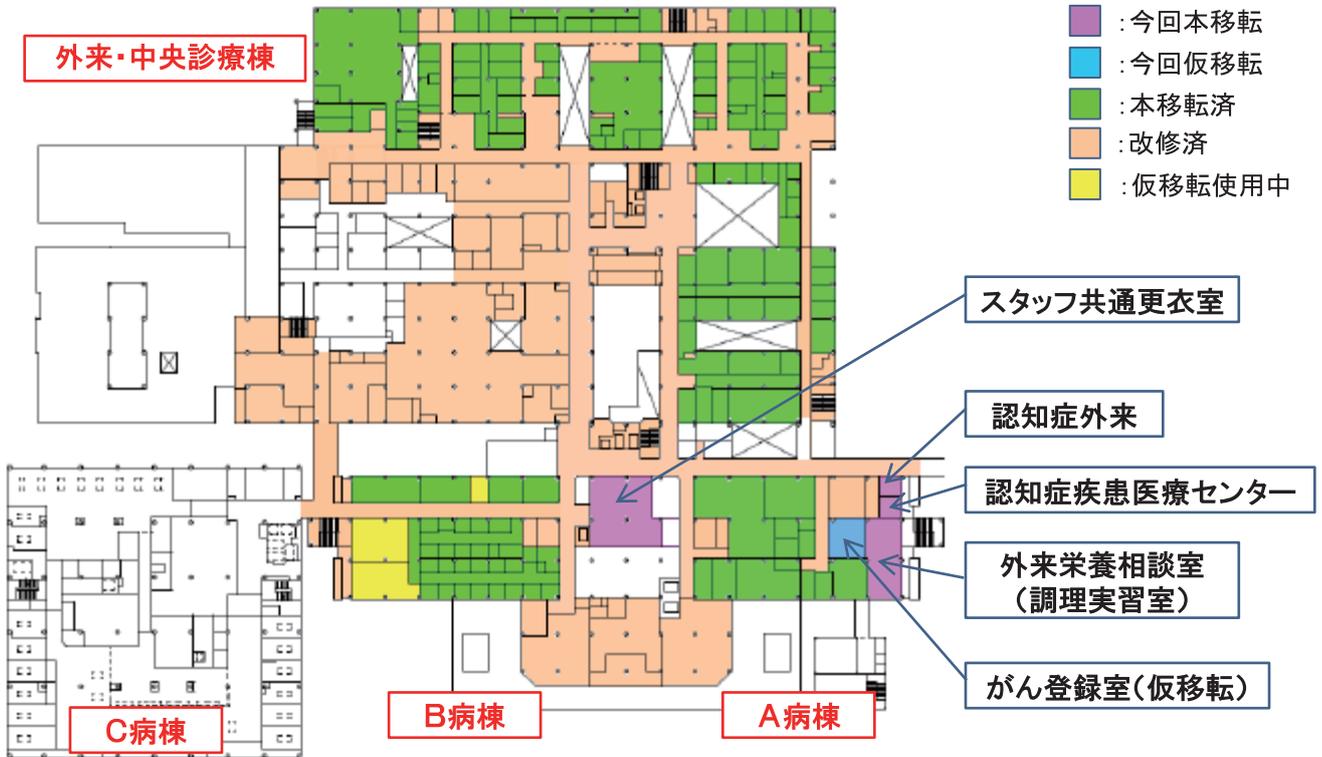
外来・中央診療棟の1階部分では、外科、脳神経外科、在宅ケア指導室の一部が本移転します。また、病院玄関入口の郵便局がAB病棟エレベータホールに面して本移転します。病棟部分では、旧薬剤部跡地に仮移転している患者給食厨房が改修後の厨房に戻る形で本移転します。また、A病棟2階にある理容・美容室がAB病棟エレベータホールに面して本移転します。



病院 2F

病棟の2階部分で、認知症疾患医療センター、認知症外来、外来栄養相談室が本移転され、調理実習室(栄養治療室)が新設されます。また、AB病棟エレベータホール前にあった電気室がスタッフ共通更衣室に改修され運用を開始します。スタッフ共通更衣室には、職員の手、業務委託スタッフも利用することとなります。

電算棟2階にあるがん登録室が病棟側に仮移転します。改修工事後、元の場所に本移転します。



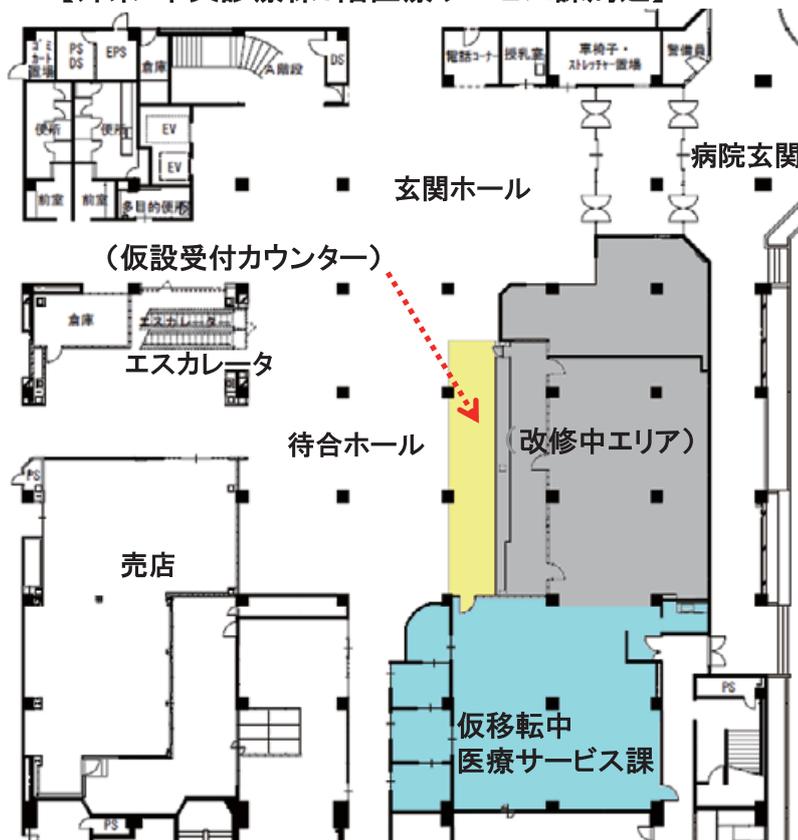
今後の移転スケジュール(予定)について

年月	日	事項	備考(移転部門等)
H25.1月	12日(土)~27日(日)	第4ステージ移転	
2月	1日(金)~3日(日)	医療サービス課本移転(居ながら改修)	医療サービス課、入退院管理センター、地域医療連携センター
	9日(土)~11日(月)	待合ホール床張替	
	16日(土)	理容・美容室移転	
3月	2日(土)~中旬	B病棟仮病室廃止→カンファレンス室への改修	
	21日(木)、22日(金)	厚生局使用前検査	
	23日(土)、24日(日)	第5ステージ移転	治験管理センター、緩和ケアセンター、感染対策室、がん登録室、医療情報研修室、入院栄養相談室、栄養治療諸室、外来師長室、看護教育支援室、患者図書室、患者休憩室
	30日(土)、31日(日)	A病棟Ⅱ期(最終)移転	A病棟3階~A病棟5階

医療サービス課周辺の移転について

外来中央診療棟1階では、医療サービス課周辺の居ながら改修が順次実施されています。現在は、医療サービス課受付カウンターが患者待合ホール側に仮設され、カウンター裏の事務室が改修工事中です。事務室は旧薬剤部の調剤室側に拡張された部屋(エリア)で仮移転した形で業務を行っています。医療サービス課周辺の改修工事の完了は1月末で、2月初旬に本移転を実施する予定です。入退院管理センター窓口の他、各種相談室等が新設され患者サービスが強化されます。

【外来・中央診療棟1階医療サービス課周辺】



【仮移転中の医療サービス課内】



【仮設カウンター及び待合ホール】

24時間営業コンビニ(ローソン)1/7オープン



外来中央診療棟1階中央部分にあった売店が、面積を拡充して年中無休24時間営業のコンビニ(ローソン)「島根大学病院店」として1月7日(月)から新装開店します。

予てから要望の強かった24時間営業の売店として、患者さん及び患者さん家族等、学内職員・学生等の利便性が格段に向上することが期待されています。

また、4月からはコンビニ入口左側奥に患者休憩室が完成します。こちらで飲食を行うこともできるようになります。

←【開店準備が進むコンビニ】

いよいよ病院再開発事業も完了まで3か月を残すのみとなりました。当面、仮移転、撤去・穿孔工事等でご不便をおかけいたしますが、今後とも皆様方のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

就 任 挨 拶

緩和ケア講座 中谷 俊彦

この度、平成24年11月1日付で新しく発足した緩和ケア講座を担当する辞令を受けました。私は島根医科大学（現島根大学医学部）を卒業してから附属病院麻酔科で臨床医の道に入りました。麻酔科医として術前診察から始まる手術麻酔を行うこと及びその関連領域で全身管理を学び、その後はペインクリニック、緩和ケアに携わってきました。ペインクリニックでは痛みを悩む患者さんたちに薬物治療、神経ブロック治療、カウンセリングなどを通して関わり合い、痛みに伴うさまざまな苦しみを教えていただきながら今日に至っています。

平成15年に当大学附属病院に緩和ケアセンターが設立されてからは、麻酔科専任医師としてチームによる緩和ケアを協力して行ってきました。がん対策は予防・診断・治療に大きく分類できますが、緩和ケアは手術療法・化学療法・放射線治療と共に臨床の1分野を担っています。まだ歴史の浅い領域ですが、緩和ケアは「全人的な痛み」すなわち身体の痛みだけでなく、精神的な痛み、社会的な痛み、そしてスピリチュアルペインを統合して、末期からだけでなく診断を受けた早い段階からのケアにあたることを心がけます。そのためには医師だけでなく、看護師、薬剤師、理学・



作業療法士、栄養士、MSWなど多くの専門領域が集まったチームで、患者さんとご家族の痛みに向き合わなければなりません。チームによるケアを推し進めていくことが重要です。また、当院の緩和ケア病棟は昨年6月に国立大学病院として全国で2番目に開設されて、スタッフ一同が専門病棟として緩和ケアの提供に努めています。

これからの緩和ケアの普及と進展、そして人材育成という課題に対して、微力ではありますが尽くしていく所存でございますので、皆様のご指導・ご鞭撻のほどをどうぞよろしくお願い申し上げます。

ロボット支援前立腺全摘除術を始めました！

島根大学附属病院では11月19日から手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いた前立腺全摘除術を開始しました。現在週1日のペースでロボット支援前立腺全摘除術を行っており、経過はきわめて良好です。島根大学医学部附属病院でのロボット支援手術システム「ダ・ヴィンチ」の導入は井川病院長の多大なるご尽力の賜物であり、この場をかりて厚く御礼を申し上げます。

さて、現時点でロボット手術に対して保険収載があるのは前立腺全摘除術のみですので、当科が中心となってロボット手術を行っています。ロボット手術と言ってもロボットが勝手に手術をする訳ではなく、操作するのは人間であります。低侵襲な鏡視下手術の特徴に加えて、従来不可能とされていた角度からの視野の確保や細密な鉗子の動きを可能にしたのが「ダ・ヴィンチ」です。従って、ロボット手術を行うにあたっては認定が必要となり、現在当科で認定された医

泌尿器科 椎名 浩昭、安本 博晃

師は椎名浩昭と安本博晃の2名ですが、今後は若い先生方にも積極的に認定を取得して頂くようにしています。

高額なダ・ヴィンチの導入の利点は何か？すなわちロボット支援手術の利点は何か？これが議論の対象となるのは至極当然でございます。前立腺全摘除に関しては1) 傷が小さい、2) 出血量が少ない、3) 尿禁制あるいは勃起機能など神経機能への影響が少ない、4) 確実な尿道膀胱吻合が可能である、5) 術後の回復が早いなどが上げられます。すなわち低侵襲手術の代表でありますので、術後に良好なQoLが維持されることとなります。さらに、ロボット手術では手術室のモニターにリアルタイムに手術の3D画像を映し出しており、1) チームとして情報を共有できる、2) より詳細な手術内容をムとして情報を共有できる、2) より詳細な手術内容を学生あるいは医療スタッフに教示できる、などの利点もございます。今後は、泌尿器科的には腎部分切

除や膀胱全摘除術などへの応用も可能ですし、婦人科、外科、呼吸器外科、循環器外科、耳鼻咽喉科領域の手術への応用が期待されます。また、今年3月までにはダ・ヴィンチシステムのシミュレータがクリニカルスキルアップセンターに設置される予定ですので、教育面からも更なる発展性があるものと思われま

す。泌尿器科ではロボット手術を代表とする低侵襲手術から進行期がんの集学的治療まで幅広く泌尿器科疾患に対応しており、「島根の医療は島根大学附属病院で完結」をモットーに日々研鑽を積んでおります。泌尿器疾患で悩んでおられる方がおられましたら是非とも島根大学附属病院泌尿器科を紹介して頂きますようお願い申し上げます。



ダ・ヴィンチと記念撮影！左より井川幹夫病院長
椎名浩昭教授、安本博晃講師

島根県における顎顔面口腔領域専門の “島根 災害派遣口腔医療チーム”の配備について (医学部歯科口腔外科と島根県歯科医師会の取り組み)

この度、当院では、大地震や天災などでの災害発生時や、航空機や列車事故等が発生した場合の災害急性期（おおむね48時間以内）に対応するため、“島根大学医学部附属病院災害派遣医療チーム（DMAT: Disaster Medical Assistance Team）”との連携体制の元に、（社）島根県歯科医師会との間で、島根県内や山陰地域での災害発生時に、顎顔面口腔・歯科領域に対し専門的に活動できる、機動性と継続性を持った災害派遣口腔医療チームを配備しました。

これまで、（社）日本歯科医師会の積極的な取り組みとしての、昨年の“東日本大震災”をはじめとした、被災した方々への口腔・歯科的治療や口腔ケアによる歯科医療支援や、法歯学・歯科的な個人識別と身元確認の重要性と、われわれ医学部歯科口腔外科の専門性としての急性期口腔顎顔面外傷治療への取り組みを全て融合させ、連携協力体制のもとでのチームとして発足させたもので、全国でも初の取り組みです。すでに、災害発生のある事を想定した県内での大規模DMAT訓練にも積極的に参加し、実行性と機能性を高めています。

われわれの取り組みについて、島根県歯科医師会との間で連携構築した体制と、これまでの活動内容を、平成24年11月26日（月）午後より、山陰および島根県内の報道機関各社に対し、井川病院長と（社）島根県歯科医師会より専務理事渡邊先生、学術担当理事上田先生の同席のもと、報道発表を行いました。

歯科口腔外科 管野 貴浩

天災や災害は、何事も誰しも無いにこしたことはありませんが、われわれの結成した“島根災害派遣口腔医療チーム”によって、有事の際の島根県民の方々への迅速な対応と、安全な医療提供をお約束させていただきます。

（顎顔面口腔領域の特殊・専門性と災害派遣口腔医療チームの取り組みについて）

- ・災害急性期医療現場としてのトリアージ、応急処置、搬送の提供
- ・災害急性期医療現場、医療機関での専門的な顎顔面口腔外傷治療の提供
- ・災害疾病者や被災者への、歯、顎、口腔への専門的歯科治療と口腔ケアの提供
- ・法歯学的診断による災害現場・医療機関での個人判別認証の提供



島根大学および島根県における放射線治療の現状と2つの提言

放射線治療の対象となる疾患は文字どおり頭のとっぺんからつま先までに及び、年齢でも乳幼児から100才以上の超高齢者までをカバーしています。そのために放射線治療のご相談やご依頼はほぼ全科におよんでおります。私が放射線治療科に着任して早くも8か月が経ちました。おかげさまで臨床各科のご協力により治療の体制作りも順調に進んでおり、粒子線治療以外はすべてを行えるようになりつつあります。新患の放射線治療カンファレンスは火・木・金の定期開催以外にも必要に応じて随時行っています。皆様のご要望やご相談に迅速に対応しておりますのでお気軽にご相談下さい。

島根県内には放射線治療施設が5カ所ありますが県東部に偏在しており、大学より西では辛うじて浜田医療センターに1カ所ありますが、ずっとこれまで常勤の放射線治療専門医は不在です。そのために浜田市近辺からも放射線治療を希望して大学病院に来院される患者さんが稀ならずみられます。放射線治療の多くは数十回の治療を土・日・祝日を除き4-7週間にわたって毎日行う必要があります。遠方にお住まいの方は毎日の通院に難渋される場合が多くなります。これからの冬の時期になるとなおさらのことと思います。

そのような患者さんは治療期間中、大学近辺の宿泊施設に泊まって頂く他はありません。大学敷地内にあ

放射線治療科 猪俣泰典

る医学部会館及び通常より安く宿泊可能な提携施設（ニューウェルシティ出雲、HOTELながた）はそのような目的のために利用可能と聞いておりますが医学部会館はいわゆる素泊まりとなります。土地が広大で通院不能な患者さんが多いカナダなどでは病院とホテルとの中間的な性格を有する宿泊施設が病院の近くに安価で提供されており、多くの遠方から来院する患者さんに便宜を図っています。島根県の事情にも通じる所があります。さしあたって医学部会館を患者さんのために食事等を含めてもう少し便宜を図れるように出来ないかと考えています。

島根県内の5ヶ所の放射線治療施設のうち2ヶ所は放射線治療専門医が不在です。放射線治療医師の絶対的な不足の中でこれらの病院に常勤の放射線治療専門医を派遣することは現時点では困難な状況です。非常勤で補うにしても東西に距離のある島根県では限界があります。この状況を少しでも改善するためにネットワークの構築による遠隔放射線治療が一つの有望な手段と考えています。ただし、放射線治療に限らず、画像データのみで治療が完結することはありません。あくまでも治療を破綻無く行うためのセーフティネットとしての補助的な役割であり、将来、放射線治療専門医が充足して常勤医師を派遣できるようになるまでの移行措置と位置づけています。



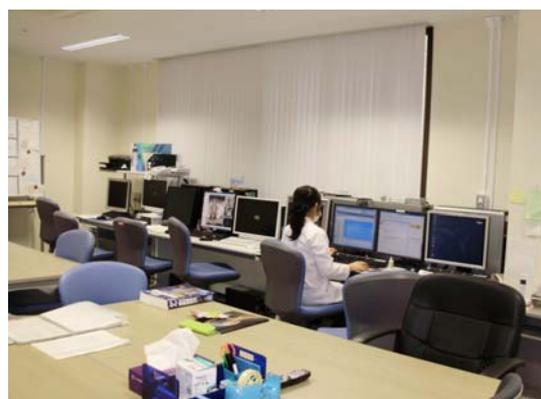
第1 放射線治療室



第2 放射線治療室



密封小線源治療室



放射線治療計画室

しまね地域医療支援センターは頑張っています

地域医療支援学講座 谷口 栄作

平成24年度の初期臨床研修のマッチングでは県内全体で50人、大学は24人でした。ここ数年50人前後で横ばいとなっています。しかし後期研修での大学帰学率は平成24年度データで21名の24.4%であり、これはマッチングが始まる平成15年度の半分程度となっています。このような状況から、今後は初期臨床研修医をいかに増やすかと同時に、後期研修医の帰学率を上げていくことも重要であります。

そこで、大学と県が連携して、県内で働く若手医師等を支援するために、平成23年8月から「しまね地域医療支援センター」（センター長：井川附属病院長）を設置しました。センターでは学内はもとより、学外関係機関との連携を図り、以下の取り組みを実施しています。

- 1) 若手研修医と個別面談を通じてキャリア支援
- 2) 島根レジナビの開催、全国レジナビへの参画

- 3) 県外医学生との交流会
- 4) 若手医師の研修会の開催
- 5) 県内の医療機関内での医療従事者支援のためのワークショップ
- 6) 地域医療に関する住民理解を深めるために住民活動のワークショップ
- 7) 女性医師支援を含むワークライフバランス支援
- 8) 県内の研修情報を県内、県外の学生及び研修医に対する情報発信 等

さらに「しまね地域医療支援センター」は平成25年4月からは、一般社団法人として組織基盤を強化し、大学、県及び市町村行政、県内医療機関等が協力して、新たな第1歩を踏み出す予定となっています。オール島根で取り組むことにより、医師が、島根県を軸足にして、キャリアアップできるような体制構築が進んでいます。



ヘルスサイエンスセンター島根が医療相談事業に「ミュウ太」を活用

医療情報部 花田 英輔

山陰電工(出雲市)との共同研究により開発した双方向通信システム「ミュウ太」は皮膚科による遠隔医療支援や卒後臨床研修センターによる研修医セミナーの中継に6年以上活用されています。

この度(公財)ヘルスサイエンスセンター島根(旧 島根難病研究所)から、島根県の委託を受け実施中の「難病相談」にミュウ太を活用したいとの申入れがあり、昨年10月26日に予行の上、11月8日に初回を実施しました。

これまで「難病相談」は本院の医師が県内各地の保健所に赴き、難病患者や家族からの相談に無料で応じる形式で行われてきました。最盛期は年に50回以上行われていましたが、近年は医師不足により派遣が難し

くなるなどにより、昨年度は半分程度まで減っています。

今回は津和野町周辺の膠原病患者が津和野共存病院に集まり、本院膠原病内科の村川診療科長(診療教授)が本部棟第2会議室で相談を受ける形で実施され、事前に申込んだ4件5名の患者さんやご家族の相談が行われました。

予行では本院側ネットワークに障害が発生したものの、新聞社4社が取材し翌日または11月初旬に記事が掲載されました。

初回はほぼ問題なく実施され、相談の様子はNHK松江放送局が取材し、ミュウ太を通じた相談者インタビューを含め、当日夕方のニュース内で特集として放

送されました。相談者は「専門医がいない地域なので、気軽に相談できることは素晴らしいこと」と感想を述べられました。

ヘルスサイエンスセンター島根の糸賀浩之難病相談支援課長は「今後、津和野については年2回程度ミュー太を利用したい。他科や他のミュー太導入病院でも実施したい」との希望を述べています。



津和野共存病院の様子
(左が相談者、右は津和野共存病院の相談担当者)

ミュー太の利用により、医師は移動時間を節減しながら相談業務を担当できるとともに、節減した時間を当院での診療時間に充てることができ、医師と相談者の双方に効果が期待されます。また今回のミュー太の新しい利用法、本学以外が主体となった利用は、「ミュー太」の活用拡大を期待させます。



第2会議室で相談に応じる村川診療教授
(相談者の手の様子を拡大して観察中
奥はNHKカメラマン)

出雲産業フェア2012に出展しました

11月3日(土)、4日(日)の両日、出雲ドームにおいて「出雲産業フェア2012」が開催され、医学部・附属病院から出展しました。来場者は2日間で10,000名を越え盛況でした。この出雲産業フェアは、「今からはじまる“出雲創生物語”～あなたの知らない産業がここにある～」をテーマに、地域企業や大学がもつ技術・研究内容を市民・企業に広く情報発信して、産学連携の推進や地域活力の創出などを目的としています。

地元企業と共同研究中の「簡易型離床確認システム(医療情報)」や特許申請中の「地域型救急医療ネットワークシステム(救急医学)」には医療や介護福祉

産学連携センター地域医学共同研究部門 中村 守彦の関係者が多く訪れました。また、地域特産の薔薇「さ姫」の非常に高い芳香性を活用した、高齢者認知症の入浴ケア(地域看護)や、国民病とも言えるスギ花粉症の緩和を目的とした機能性食品開発(耳鼻科)にも大勢の来場者が興味を示しました。

島根医科大学のときから10年連続で出展してきましたが、この交流を通じて産学連携による共同研究が沢山誕生しました。医学部・附属病院の技術シーズを実演などで分かりやすく地域社会に伝える大切な場となっています。



医学部・附属病院のブース



離床確認システムの実演

第9回 島根大学医学部附属病院関連病院長会議を開催

総務課 総務担当

10月18日（木）18時から出雲ロイヤルホテルにおいて「第9回島根大学医学部附属病院関連病院長会議」を開催しました。

この会議は、本院への患者紹介や本院からの医師の派遣等を通して関係の深い病院・診療所との意思疎通を図ること、また地域医療に貢献することを目的として設置され、毎年1回開催しており、今年で9回目を数える本会議には、島根県内46関連病院の病院長等と、井川病院長を始めとする本院関係者33名が出席しました。

冒頭で井川病院長から挨拶があった後、「教育・研修について」及び「地域医療について」と題して、大田総合医育センターやがんプロフェッショナル養成基盤推進プランの取り組み、10月から指定された救命救急センターの設置、ダ・ヴィンチの導入等、本院の現状及び取り組み状況等について、報告が行われました。

また、議事に引き続き懇親会が催され、関連病院のの病院長等と本院関係者との間で、熱心に情報交換が行われました。

当日の資料をご覧になりたい方は、病院ホームページ下記URLを参照ください。

http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/intyo_houkoku.html



島根県警察と包括的連携・協力に関する協定を締結

総務課

平成24年10月31日（水）島根県警察本部において、小林祥泰学長、彦坂正人島根県警察本部長のほか関係者が出席して、本学と島根県警察との包括的連携・協力に関する協定の締結式を行いました。

本学と島根県警察は、これまでもにおいても防犯活動等において連携・協力を進めてきたところですが、この度の包括的連携・協力に関する協定の締結は、「安全・安心な地域社会の実現」に向けてさらに組織相互の連携・協力を推進していくものです。

締結式で小林学長からは、「島根大学は地域の活性化、及び地域の拠点としての大学を目指しており、地域貢献は本学の重要な使命である。この協定を学生の教育面に生かすとともに、安全・安心な地域社会の実現に繋げていくよう新しいアイデアを出して活動を行っていききたい。」と挨拶があり、彦坂島根県警察本部長からは、「島根大学には活力があり柔軟性のある若者があふれている。この活力と研究成果の蓄積等知的財産も活用させていただきながら相互に緊密な連携

を図り、地域の安全安心、住みやすい地域づくりを協働で構築していきたい。」と挨拶がありました。

この協定の締結により本学と島根県警察との連携・協力の機会がさらに増加し、本学学生があらゆる機会をとらえて地域貢献活動に参加することが、学生自身の人間力の向上にも資するものと期待しています。

島根県警察との協定締結により、島根大学の包括的連携協定機関は、自治体7機関、国1機関、企業1機関の9機関となりました。



小林学長と握手を交わす彦坂警察本部長

平成24年度医学部ホームカミングデー講演会を開催しました

10月13日（土）医学部大学祭（くえびこ祭）に併せ、平成24年度医学部ホームカミングデー講演会を開催し、在学生の保護者等を含む約100名の参加がありました。

大谷医学部長、佐藤利昭同窓会連合会副会長の挨拶に続き、小林学長から「島根大学の進む道」、福島県立医科大学衛生学・予防医学講座教授 福島哲仁氏から「福島第一原子力発電所事故の教訓」と題してそれぞれ講演があり、参加者は、大学の現状や今後の取り組

総務課 総務担当

み、福島原子力発電所事故の対応を基に万一の事故発生に対する医学部としての対応方法等に熱心に耳を傾けていました。

講演会の後、井川病院長から昨年6月に開院した新病棟及び改修された外来中央診療棟の設備、機能等概要説明があった後、希望者を対象に、女性・個室病棟、小児センター病棟、緩和ケア病棟、手術部に新たに導入された内視鏡下手術システム「ダ・ヴィンチ」の見学を行いました。



小林学長講演風景



福島県立医科大学 福島教授講演風景



挨拶を行う佐藤同窓会副会長



参加者の皆さん

「山陰と阪神を結ぶ医療人養成プログラム(4大学プログラム)」 女性医師のキャリアアップ支援に係る交換会in 神戸

文部科学省「大学病院人材養成機能強化事業（大学病院間の相互連携による優れた専門医等の養成）」に伴う「山陰と阪神を結ぶ医療人養成プログラム（4大学プログラム）」女性医師のキャリアアップ支援に係る交換会が、11月11日（日）ANAクラウンプラザホテル神戸で開催され、本学からは村川洋子膠原病内科長、庄野敦子麻酔科学内講師ならびに研修医の江田佐江子医師、林美香医師が参加しました。

この交換会は、神戸大学および本学が担当し、神戸大学D&N plusブラッシュアップセンター長錦織千佳子教授の司会のもと、はじめに島根大学コーディネータの廣瀬診療教授が開会の挨拶ならびにプログラム概要を説明しました。

続いて、旭川医科大学 復職・子育て・介護支援センター副センター長 山本明美准教授から、「子育て支援の次に手がけることー意識改革とキャリア教育」と題して基調講演がありました。山本副センター長はそのご講演のなかで、ご自身のお母さんを介護された経験から、もっとも重要なのは各レベルでの医療に関わる者の意識改革であることが強調されました。それは、病院管理者や教授（科長）レベル、自分自身のレベル、子からみた両親のレベル（孫からみた祖父母のレベル）などそれぞれの立場での意識改革が重要であるとのことでした。また、学会レベルでは皮膚科女性医師の会、個人レベルではFacebookの活用や旭医なでしこ会、学内では数々のセミナーや講演会を開催し、女性医師に対する支援の必要性とともに、身近な人からのロールモデルを参考にすることなど、具体的な提案を発信してきたとのことでした。例えば、妻が海外留学をするため、夫である外科医が二人の子育てをし

病院医学教育センター 廣瀬 昌博

た経験談「毎日がキャンプ生活でした」や両親が医師で自分自身も医師となった研修医の経験談「共働きでも子は育つ」などが紹介されました。また、そのような研修会にはまだまだ「頭が硬い」と思われる診療科の教授に参加を要請し、診療科レベル、学内レベルでの意識改革も実施してきたとのことでした。

休憩をはさんで、テーマを「女性医師のキャリアパスを考える」として参加者を年齢的に偏りがないよう4グループに分けたワールドカフェスタイルで、ワークショップが開かれました。Aグループは「親の意識改革」、Bグループは「講演会に人をどう集めるか?」、Cグループは「女性医師がキャリアアップを図るためには?」およびDグループは「学生や若い医師にキャリアパスをいつどのように意識させるか?」のサブテーマで議論が続きました。男性医師の親からすると、女性医師を嫁にもらうことはご法度のように、そのような考えを打破するためには医学部入学式や卒業式の際に親の意識改革をすることが重要であることや「育爺（イクジイ）」や「育婆（イクバア）」となるロールモデルが必要だ、などの報告がありました。また、キャリアアップを図るためには病院や職場での上司、同僚らの理解が不可欠で、その上で専門医プログラムにそった研修が必要だ、などの意見もありました。

このように多数の女性医師が大学間、年齢および立場などの垣根を越えて、神戸に参集しディスカッションすることができ、このことこそが本事業、本プログラムの最大の収穫であると思われました。

交換会の終了の際には神戸大学コーディネータ伊藤智雄教授から挨拶があり、そのまま昼食会へと移動し、白熱した議論が続きました。



質問に応える山本准教授（左）司会の錦織教授（右）



白熱の議論が続くワークショップ。発表中の本学麻酔科庄野医師（白板右）

「大学病院人材養成機能強化事業」に伴う 島根大学医学部附属病院「地域コーディネータ会議」及び学内FD

病院医学教育センター 廣瀬 昌博

去る11月17日（土）、文部科学省「大学病院人材養成機能強化事業（大学病院間の相互連携による優れた専門医等の養成）」に伴う「地域コーディネータ会議及び学内FD」が、ニューウェルシティ出雲で開催されました。

このFDは、本事業が最終年度であることから、テーマを大学病院と地域医療機関及び県が更に連携・協力して地域医療に貢献できる質の高い専門医及び臨床研究者を育成することを目的に「地方大学における総合力のある専門医及び臨床研究者の育成～地域連携基盤を強化するために～」として、独立行政法人国立大学財務・経営センター理事長 豊田長康先生をお迎えし、島根県、地域関連病院および大学関係者ら50余名が参加しました。

本学総合医療学講座 石橋 豊教授の総合司会のもと、プログラム実施代表者の地域医療教育学講座 熊倉俊一教授から挨拶があり、その後、第一部で豊田理事長による「大学病院と地域医療～複雑系の中での模索～」と題してご講演がありました。豊田理事長は三重大学医学部産婦人科教授の後、平成16年4月から三重大学長を務められ、平成16年に開始した臨床研修制度による影響をまともに受けた大学学長としてのご経験と豊富な知識に基づく貴重なご講演でした。とくに地域医療の問題は、国、自治体（8地域住民）、医師会、医局、関連病院、研修医・・・など、それぞれ異なる意思を持った者の寄せ集めで、目的や利害は多様であり、解決を困難にしていることが問題であることを述べられました。さらに、地域における医師不足の要因は総医療費抑制施策と医師養成数の減少、医師の大学医局離れ、臨床研修の必修化、医療訴訟のリスク、女性医師の増加、国立大学の法人化など一大学のみでは解決できない要素を含んでいることが説明されました。そのような背景で始まったマッチングにおいて三重大学は、2005年2007年はワースト、それ以外はワースト2という深刻な状況であり、それは日本の大学に共通した問題であるとの説明が続きました。

このような悪条件のもとでの三重大学の地域医療再生のための医師養成の方針（竹田寛三重大学病院長による）は、①卒後臨床研修（初期研修）と②後期研修の充実および③総合診療医（家庭医療医）の養成でした。具体的には、①はMMC（Mie Medical Complex）卒

後臨床研修センターを設立し、県内17基幹病院と協力病院における卒後臨床研修の充実、②は三重地域医療支援センターにより、総合内科、外科、専門診療科などの後期研修プログラムを大学や県内基幹病院と連携して作成することで後期研修の充実を図り、そして、③については、三重大学医学部地域医療学講座が推進してきた、三重・地域家庭医療ネットワークの構築をさらに発展させ、地域医療での不足分を補完する役目を担うことでした。

その結果、三重大学におけるマッチング数は医療施設のなかでは下位に属していますが、三重県全体でみると研修医の定着率が徐々に上がってきているとのことで、今後の地域医療を考えるためには大学だけではなく、「大学病院・地域医療系」の深化が必要であるとのお話でした。

続いて、第二部パネルディスカッションでは4大学プログラムコーディネータ廣瀬診療教授の司会のもと、隠岐広域連立隠岐病院 小出博己病院長及び津和野共存病院 飯島献一副病院長から離島ならびに中山間地域における医療の非常に深刻な状況についての説明があり、続いて雲南市立病院勝部琢治地域医療支援コーディネータから同病院の人材育成について報告がありました。また、本学麻酔科二階哲朗講師から、医師を地域関連病院に派遣する立場から報告がありました。そのうえで、島根県健康福祉部 吉川敏彦医療政策課長から島根県としての立場からまた、本プログラムに関わる熊倉教授ならびに石橋教授からは大学の立場からコメントがありました。

今回の会議およびFDでのディスカッションでは、第一部の豊田先生のご講演を受け、本プログラムの特性を生かし、垣根のとれた大学連携による医師育成の場を拡大するとともに県や市町村、地域関連病院および大学すべてが「オール島根」のもとに一丸となって、医療連携ネットワークを構築し、魅力あるプログラムで研修医が島根県に定着できるよう、尽力することが重要であることを認識して、終了しました。

なお、参加のみなさまのおかげをもちまして、本地域コーディネータ会議およびFDを盛会裡に終えることができました。紙面をお借りして御礼申し上げます。有難うございました。



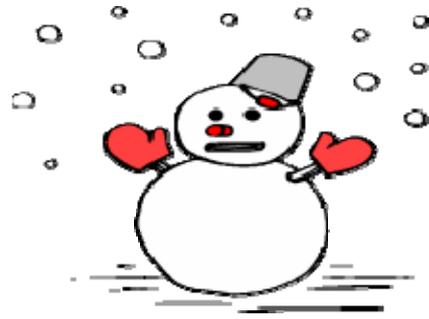
質問に応えられる豊田長康理事長



地域コーディネータ会議の本学関係者



参加頂いた 島根県、地域関連病院病院長等



「平成24年度大学病院人材養成機能強化事業ステップアップ研修会を開催しました」

去る11月9日（金）に平成24年度文部科学省「大学病院人材養成機能強化事業」の一環として「ステップアップ研修会」を開催しました。本研修会は、臨床研修の初期・後期研修医、指導医ならびに診療情報管理士等を対象に臨床研究解析能力の習得を目的として「総合診療」・「臨床研究」の第一人者である聖路加国際病院福井次矢病院長をお招きし、「医師のプロフェッショナルリズム」についてご講演をいただきました。

ご講演では前半は「professionalism」について、後半ではEBMやQIなどを含む「臨床疫学や臨床研究」に関するお話でした。「医師としてのProfessionalismの定義は何か？」を回答するのは困難で、それ故、古来より議論され、時代の変遷とともにその定義や考え方も徐々に変化していくものです。しかし、福井先生はいくつもの論文や資料を提示し、professionalismとしての定義や要件があり、邦訳するのは難しいが、利他主義（Altruism）や誠実・高潔・真摯さ（Integrity）がもっとも要求されるとのことでした。

病院医学教育センター 廣瀬 昌博

医師憲章では、基本的3原則として患者の福利優先、患者の自立性、社会主義（公平性）があげられています。また、別の論文では知識と技術からなる診療能力と医師としての判断・行動の根底に心構え・価値観を兼備しておく必要があるとのことでした。

一方、後半では、昨年度と同様、福井先生のこれまでのご経験をもとに「public health」や「臨床研究」のコンセプトとその重要性のお話で、臨床研究は日常診療のなかにこそ、埋もれているとのことでした。例えば、福井先生の学位論文は、佐賀医科大学在籍中に、「初診の診断名と確定診断名が合致している割合はどの程度か？」という研究だったそうで、非常に印象的でした。また、別の例では、糖尿病の患者のフォローが医師によって異なるかを電子カルテからHBA1c値を抽出し医師別にその推移をみたり、あるいは院内の転倒・転落事例について、それまで収集されたデータを収集・解析し、統計学的に関連因子を探り、改善に向かわせるとのお話もあり、研究のネタは日常診療のあらゆるところにあることの実例を紹介していただきまし

た。これらの研究は診療のQuality Indicatorともなり得るもので、非常に興味深いものでした。

わが国では臨床疫学や臨床研究等の専門家が少ないこともあって、本日の二つの話題も臨床医にはあまり関心を持たれない傾向にあると感じていますが、両者は日常診療に密接に関連しているものです。今回、研修会のテーマとしてprofessionalismを取り上げたのは、臨床研修で習得すべきは診療能力ばかりでなく、



質問に回答される福井次矢先生

心構えやしつかりとした価値観をもつことが重要であること、また、研究はどこにいてもできることを福井先生の研修会を通じて知って頂くことが重要であると考えたからです。

なお、近隣の医療機関の方も含め、多数の皆様にご参加いただき、活発な討論により本会が成功裡に終了できましたことを、参加者並びに関係者の皆様方に御礼申し上げます。



熱心に傾聴する参加のみなさん

潰瘍性大腸炎に対する新規メサラジン製剤の有効性の検討

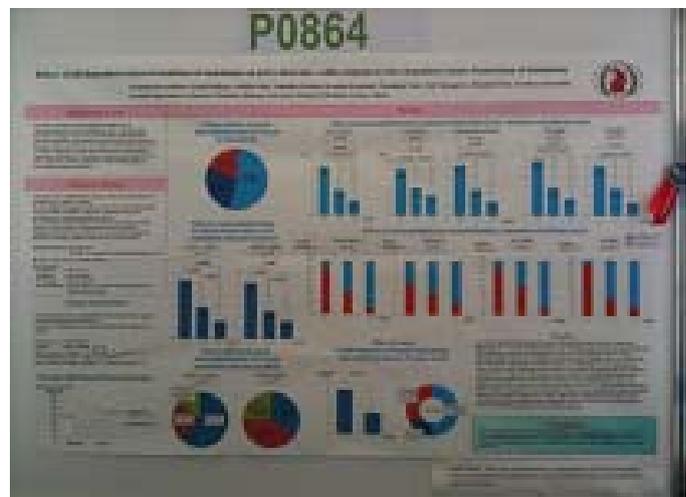
2012年10月にオランダで行われたヨーロッパ消化器病学会（UEGW）に、「時間依存型メサラジン製剤抵抗性の潰瘍性大腸炎に対するpH依存型メサラジン製剤の有効性の検討」という演題を発表してきました。ポスター発表でしたが、「優秀演題」の一つに選ばれたので報告させていただきます。

一般的に潰瘍性大腸炎の治療は経ロメサラジン製剤が第1選択薬になります。従来本邦では時間依存型メサラジン製剤であるペンタサ錠が治療の第1選択薬となっていました。2010年より本邦でもpH依存型メサラジン製剤のアサコールが使用可能となったため、今回はアサコールの治療効果を検討した研究結果を報告してきました。当科の関連病院において、ペンタサ錠にて寛解維持困難だった潰瘍性大腸炎症例で、アサコール錠に変更した症例の臨床的有効性を後ろ向きに検討しました。結果として、変更した約8割の症例で臨床スコアの改善が見られたこと、特に遠位型の症例で著明な改善がみられたこと、アサコール変更により半数の症例で局所注腸製剤の中止が可能となったことなどを報告しました。また今回の検討で最も評価されたのは、ペンタサ4g/日の高容量投与が行われた症例でもアサコール変更により約7割の症例で臨床症状の改善を認めたと報告した点だと思っています。過去にペンタ

消化器内科 川島 耕作

サ常用量とアサコールの治療効果を比較した報告はあったものの、ペンタサ高容量とアサコールの治療効果を検討した報告がほとんどないため、今回の我々の報告が評価されたのではないかと考えています。

なお、今回の報告は、大学病院の症例だけではなく、多数の関連病院の先生方にも多大な御協力いただき、多数の症例を集計することができたためと思っております。今後も当科では、関連病院とも密に連携をとりながら、より良い炎症性腸疾患診療を目指していきたいと思っております。



オーストラリアからの材料部見学について

材料部長 大平 明弘

本院に導入されている鋼製小物の個体管理システムは世界で初の試みです。2012年11月26日に、豪州のSt. John of God Subiaco, Logan Hospital, Redland Hospital, Port Pirie Regional Health Serviceなどから総勢9名の見学があり、午前中は鳥取大学、午後から本院への来訪でした。皆さん、何事にも関心があり、本院のRFID systemに驚嘆の声があがり、絶賛を受けました。会議では質疑応答を行い、その後、材料部と手術部の現場視察を行いました。さらに会議室にて、最近、作製したDVDにてシステム全体のおさらいを行いました。

2014年 から 医療機器のUDI (Unique device identification) 表示義務化が始まることになり、米国FDAは「クラス1」の製品まで、26桁の数字で管理していく方針を決定しました。日本においても、近い

将来、医療材料の管理が必要になると思われます。

この分野では2次元バーコードとRFID方式のせめぎ合いがありますが、本院が先頭にたって導入したシステムが他を圧倒していることが明らかになってきています。11月30日に行われた全国国立大学材料部長会議でも双方の方式の利点欠点に関するシンポジウムがあり、2次元バーコードの読み取りが上手く出来ず、現場ではストレスが溜まり、使ってはいただけないとコメントされていました。最近、ドットでの打ち込みも注目を浴びているようですが、最大の欠点は組み立てでの運用しか出来ず、トレースは困難です。本院のシステムは感染対策の面での安全性、業務改善や膨大な数の鋼製小物の管理運用面での経済性、データ蓄積と解析により、今後、病院の経営改善に役立つと期待されます。



会議室での質疑応答



現場視察

“名医にQ”に出演して

昨年（平成24年）の7月7日にNHKで放映された“名医にQ”に、東北大学の福土審先生および慶應大学の渡辺賢治先生とともに出演いたしました。番組は「下痢・便秘 あなたの疑問に答えます」というタイトルで、主に視聴者の方のお困りになっている便通異常に対して回答するという内容でした。私は消化器内科医の立場から質問にお答えするとともに、下痢や便秘のメカニズムについて、ストレスや腸内細菌の面から解説いたしました。

下痢や便秘は一般的な消化器症状ですが、これらの便通異常と腹痛を慢性的にともなう場合には過敏性腸症候群と診断されます。過敏性腸症候群は癌や炎症性疾患などの器質的疾患が認められないことが特徴で、その原因としては主にストレスの関与が考えられています。消化管機能は脳との密接な関連が明らかとなっており、いわゆる“脳腸相関”という立場から、ストレスに依存した消化管運動の異常について研究が進められています。

内科学講座第二 石原俊治

一方、過敏性腸症候群の新たな原因として、最近では“腸管感染症”が注目されています。サルモネラやキャンピロバクターなどの細菌や、寄生虫やウイルスなどによる急性腸炎が誘因となって過敏性腸症候群が発症するという考え方です。急性腸炎患者の10～15%程度が、慢性的な便通異常を有する患者集団に移行すると報告されており、これらを“感染後過敏性腸症候群”と呼んでいます。さらに最近の疫学研究では、感染後過敏性腸症候群の一部からクローン病や潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患を発症することも明らかとなつていきます。

今回の出演を機会に、下痢や便秘で悩んでいる方がいかに多いかを改めて痛感いたしました。私共の教室では、下痢や便秘と密接に関わる消化管機能について、感染症や免疫異常の面から臨牀的・基礎的に研究を進めており、新たな病態解明や新薬の開発につながることを期待しています。

2012年日本内分泌学会学術総会、米国骨代謝学会学術集会における若手研究奨励賞受賞の報告

内科学第一 田中 賢一郎

この度2012年4月に名古屋で開催された日本内分泌学会学術総会と10月にアメリカミネアポリスで開催された米国骨代謝学会学術集会において、学会発表演題；Muscle-derived Humoral Factor, Osteoglycin (OGN), Links Muscle to Bone（筋骨連関におけるOsteoglycin(OGN)の役割について）という発表を行い、若手研究奨励賞（Young Investigator Award）を受賞しましたので報告させていただきます。近年、視床下部や甲状腺のような古典的な内分泌臓器のみならず、筋肉からもホルモンが分泌され、多臓器の代謝調節を行っている可能性について注目が集まっています。今回、神戸大学との共同研究により、筋組織を構成する筋芽細胞よりオステオグリシンというコラーゲン合成に関わるタンパクが発現していることを発見し、さらにオステオグリシンには骨形成を促進するホルモン作用があることを初めて報告しました。筋肉量低下、骨量低下、関節障害により引き起こされるロコモティブシンドローム（運動器症候群）は、高齢者の日常生活動作（ADL）や生活の質（QOL）の低下に直接つながる重要な疾患群であり、超高齢化地域である島根県においても重要視されています。本研究により、筋肉量低下と骨量低下を結ぶ因子として、オステオグリシンが重要であることが明らかとなりました。今回

の発見がロコモティブシンドロームの病態解明や予防法の開発に結びつく可能性があり、今回の研究結果をさらに発展させ、運動器機能が低下する高齢者のADL、QOLの維持・改善に貢献することを目標に研究を継続していきたいと思っています。



第85回日本内分泌学会学術総会(名古屋)での若手研究奨励賞受賞式



米国骨代謝学会学術集会(ミネアポリス)での若手研究奨励賞受賞式

文部科学省の平成24年度医学教育等関係業務功労者表彰について

このたび、医学部附属病院検査部主任臨床検査技師の田中延子さんと医学部附属病院歯科口腔外科歯科技工士の森山繁樹さんが、文部科学省の平成24年度医学教育等関係業務功労者として表彰されました。

この表彰は、大学における医学または歯学に関する教育、研究若しくは患者診療等に係る補助的業務に従事している者で、同一職種の業務に20年以上従事し、



検査部 田中 延子

総務課 人事担当

またその功労が顕著であり他の模範となっていること等の基準を満たす者を対象とするものです。

お二人は、当院開院当初から附属病院検査業務及び附属病院歯科口腔外科歯科技工士として多忙な業務に従事し、患者サービスの向上に貢献されたことが評価されました。

表彰式は、11月22日に東京で行われました。



歯科口腔外科 森山 繁樹

島根県初のがん看護専門看護師に合格しました

2010年4月から「がんプロフェSSIONAL養成プラン」の一環として病院からのご支援を受け、昨年3月に広島大学大学院保健学研究科がん看護専門看護師コースを修了し、専門看護師認定審査の受験資格を得ました。その後11月に行われた第22回専門看護師認定審査を受け、この度合格通知を頂き、島根県で初めての「がん看護専門看護師」になりました。

専門看護師は、実践、相談、調整、倫理調整、教育、研究の6つの役割をもち、複雑で解決困難な看護問題をもつ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供することを目的としています。2012年12月現在全国で専門看護師は795名、その内がん看護専門看護師は327名が登録しています。島根県内には、これまで老人看護専門看護師が1名いるだけでした。

私のがん看護専門看護師コースを目指すきっかけになったのは、治療をスムーズに進めることができるだけでなく、患者さんの生活や意思に沿った看護を提供できているのか疑問を感じたからです。がん看護の特

看護部 宮本 冬美



徴としては、予防からサバイバーになるまでの一生涯に渡り患者さんが歩いていく道を看護師も共に支えていく姿にあると考えています。その中で、多職種の方と協働しながら、専門看護師としてがん医療に貢献できるような活動を行っていきけるように頑張っていきたいと思います。多くのがん患者さんと接しながら、日々研鑽を積んでいきたいと思っておりますので宜しくお願い致します。

平成24年度 医療安全・質向上のための国立大学間相互 チェックの訪問を受けました

国立大学附属病院医療安全管理協議会主導のもと、国立大学附属病院の医療安全と医療の質の向上を図り、医療安全管理体制確立の一助となることを目的に、毎年1回大学病院間で相互訪問のうねチェックが行われ評価し合います。

今年度は、11月19日（月）に香川大学から箕 善行副院長ほか5名の評価員の訪問を受け、今年度の重点項目である「手術の安全を確保するための手順」とともに医療安全全般について、ヒアリングおよび現場視察が実施されました。手術部では訪問チームが全身麻酔チームと局所麻酔チームに分かれ、本院手術部佐倉部長および三原看護師長を中心に手術患者の手術部入室から退室に至るまでWHO推奨のチェック項目に沿った評価を受けました。

また、香川大学も病院再開発の予定で、医療安全に関する評価とともに今後の病院再開発の参考とするため、新病棟を見学されました。その際、「ダ・ヴィンチ」手術1例目当日と重なりましたが、本院の再開発を推進された井川病院長自ら、訪問のみなさまを案内されました。

最後の講評では、病棟薬剤師による持参薬管理やリスクマネージャー会議に研修医の代表が参加していること、および手術室での医療スタッフの責任の明確さや

医療安全管理室 沖田 修治

チームワークの良さが評価される一方、地理的に不利な条件下で医療従事者の確保が困難な本院にとって、複数の専任・専従リスクマネージャーが必要であるなどの指摘事項がありました。今回の相互チェックにより、さらなる医療安全活動の向上が期待されるところです。

なお、手術部をはじめ、関係各部署のみなさまのご協力のおかげで、今回の相互チェックが円滑に修了致しました。紙面をお借りし、御礼申し上げます。



(全身麻酔チームによるチェック)



(ヒアリング)



(C病棟見学)

中国地区DMAT連絡協議会実働訓練に参加

11月3日午前8時半、岡山県南部を震源とする震度6強の直下型地震が発生したとの想定で厚生労働省から中国地区のDMAT（災害派遣医療チーム：医師、看護師、調整員の4～6名で構成）へ派遣要請があり、被災地での医療救援活動に本院のDMATが参加しました。

救命救急センター病棟 第1ユニット 渡邊 克俊

本院のDMATは、人工呼吸器や心電図モニター・除細動器などのME機器や酸素ボンベ・輸液バックや衛生材料などの資機材を車輛に積み込み、8時45分に出動しました。衛星通信電話を使用したEMIS（広域災害救急医療情報システム）から災害の情報を取り込みながら参

集拠点のひとつである川崎医科大学附属病院へ到着しました。川崎医大病院には近隣で負傷した患者が多数搬送されていましたが、ライフラインの遮断により病院機能が失われていたため手術を必要とする患者を緊急で広域搬送する必要性がありました。気道熱傷をおった意識レベルの低い患者をSCU（広域医療搬送拠点）が設置されている岡山空港へ搬送するよう指令を受け、患者を車内へ収容し呼吸・循環管理や輸液管理を行いながら岡山空港へ急行しました。岡山空港SCUにはすでに近隣の病院から広域医療搬送が必要な患者が多数搬送されていました。患者を引き継いだ後は、SCUへ搬送されてくる患者の受入れ業務を担当しながら、状態の安定化が図られた患者から順次自衛隊機やドクターヘリを使用して羽田空港など県外医療機関への広域医療搬送を行いました。

東海・東南海地震では東日本大震災のような大規模な津波被害が想定されています。中国地方は津波の影響が少ない地域であるので、被災地の患者を受け入れ

ることも必要となってきます。そうした場合、広域医療搬送が重要な救命手段となることは明確であるので、今回のような広域医療搬送拠点での訓練はとても実りある有意義な訓練となりました。



広域医療搬送訓練風景（岡山空港SCU）

平成24年度出雲空港航空機消火救難訓練に本院DMATが参加しました

10月20日（土）午後2時から、出雲空港で航空機火災事故を想定した消火救難訓練があり、本院のDMAT（災害派遣医療チーム）と傷病者役として医学部医学科の学生7名がボランティアとして参加しました。

訓練には、県立中央病院、島根県医師会、出雲医師会、日本赤十字社、出雲市消防本部、松江市消防本部、出雲市消防団、県関係者等230名が参加し、大阪発のプロペラ機が着陸に失敗して、機体から出火し負傷

総務課 総務担当

者が多数発生したとの想定で、通報・消火・救難救護訓練が実施されました。

トリアージエリア・救護所に運ばれた負傷者に対し医師、看護師等で組織されたDMATによるトリアージ（多数の傷病者を重症度と緊急度によって分別し、治療の優先度を決定する）を実施するとともに、救急車による負傷者の搬送訓練が行われ、救助体制や消防と医療機関との連携を確認しました。



トリアージを行う本院DMAT隊員

参加者：山内准教授（救急医学）、岩田看護師長、森山看護師（救命救急センター）、石原薬剤師

平成24年度医学部消防訓練を実施しました

“平成24年度秋季全国火災予防運動週間”の初日である、平成24年11月9日（金）、出雲市消防本部のご協力のもと、『深夜2時、医学部附属病院B病棟7階から火災が発生した』との想定で、職員110名が参加する消防訓練を実施しました。

訓練開始の15時、出火想定場所である倉庫の火災感知器を操作すると、A・B病棟7階、8階には異常発生を知らせる放送が流れ、7階の看護師による、現場確認、初期消火、消防署への通報と、定められた手順に従い、テキパキとした動きで訓練が始まりました。

今年の訓練要領では、この後、放送を聞きつけた夜間勤務の職員が応援に駆け付け、“仮想患者を安全な場所に避難誘導を行う”ことは示しましたが、昨年来



防災管理センターで情報を整理する災害対策本部

施設企画課

でのように、一人ひとりの役割分については明示しませんでした。

従って、参加者は事前のシミュレーションが求められることになり、看護師長を中心に熱心な討議がなされたとは、訓練前の大きな成果となりました。

この日の訓練は、種々のトラブルを抱えながらも無事に終了しましたが、まだ、訓練は終わったわけではありません。

参加いただいた方は、自身のシミュレーションどおりにできたのか、できなかった部分は何なのか、原因は何なのかを検証し、そのことについての話し合いの場を設けて頂き、導かれた内容をグループ内で共有し、常に冷静に行動できるようにお願い致します。



ストレッチャーを使用し仮想患者を移動する看護師

EMS 内部監査について

EMS内部監査とは環境マネジメントのための国際規格（ISO14001）の要求事項や島根大学が計画した取決め事項に、環境マネジメントシステム（EMS）が適合しているか、このシステムが適切に実施され、維持されているかを確認し、その結果に関する情報を学長に提供し、今後の改善に役立てるために行われるものです。内部監査は、監査チームを編成して行われますが、チームのメンバーは、内部監査員研修を受講し所定の試験に合格した人の中から選出されます。さらにその中でスキルアップコースを受講した人がチームのリーダー、サブリーダーを勤めます。今年度も7チーム（1チーム5名）で監査を実施しましたが、出雲キャンパスでは内部監査員の資格をもつ人がまだ少なく、また、資格を持つ人の部局に偏りがあるため、一部の人、

内部監査責任者 吉田 正人

一部の部署に負担をお掛けしてしまっていることを申し訳なく思っております。内部監査員による事前打ち合わせ、11月5日のオープニングミーティングと内部監査、その後の各現場での実地監査（写真1）を経て、チームごとに内部監査報告書（案）が作成されました。その結果は12月3日のクロージングミーティングで、各チームリーダーから環境管理責任者（井川病院長）をはじめ関係各位へ報告されました（写真2）。このような立て込んだ日程の中ではありましたが、ご都合を付け監査に当って下さいました監査員の方々のご尽力のお陰をもちまして、無事終了することができました。また、日常業務でお忙しい中、監査にご協力頂きました被監査部局の方々をはじめ関係各位にもこの場をお借りし、お礼申し上げます。



写真1



写真2

検査部新ユニフォーム

検査部もこれまでは医師と同じような白衣を着用していましたが、患者さんから見れば誰が医師で、誰が検査技師かわからない状況でした。検査部や臨床検査技師も患者さんにもっとアピールする必要があること、各部署でフォームの作成が行われていることなどからこの度、検査部のユニフォームも一新することにしました。

今人気のスクラブデザイン、カラーは男女共通でピーコックグリーンを採用しました。シワになりにくく、縮まない素材のため着心地はいつも最高です！もちろん背部に文字もプリントしてあります。病院検査部がスクラブタイプのユニフォームを着用している施設はまだまだ珍しいと思いますが、他部署からの評判も良くうれしく思っています。また、検査部も再開発が行われておりますが、この機会に清潔区域と不潔区域を明確に区別することにしました。それに伴い、採血や検体検査など感染・汚染の可能性のある部署で働

検査部 柴田 宏

く技師については、検査中はスクラブの上に白衣を着用しています。病棟への出張検査やチーム医療に検査部から出て活躍する技師も増えています。ピーコックグリーンのユニフォームを見かけたら「臨床検査技師さんも活躍しているな」と感じていただけたら幸いです。



12月18日にC病棟6階で病棟のクリスマス会がありました

音楽療法士さん、院内学級・養護学校の先生、入院中の患者さんなどによる出し物、また、看護学生さん、スタッフによる楽器演奏やハンドベルなどたくさんの演目で大いに盛り上がりました。また、スペシャルゲストとして、サンタクロースやしまねっこも遊びに来てくれました。サンタクロースからのすてきなプレゼントや、しまねっこのかわいいダンスに子どもたちも家族もスタッフもみんな大喜びでした。普段の病院生活では見られないような、子どもたちのとても楽しそうな笑顔が印象的でした。

小児センター病棟 中尾 美代子



2012年度クリスマスイルミネーションについて

「素敵なクリスマスイルミネーションを見ると入院中の心がやすらぎます。」「毎年楽しみにしています。」「このようなアンケートの患者さんの声に応じて、2012年度もクリスマスイルミネーションが病院南側のリハビリ公園にて実施されました。これは島根大学医学部の学生有志により例年行われており、今年度も準備、飾り付けが行われました。サンタクロースやトナカイ、スノーマンなどの様々なイルミネーションがきらきらと輝き、幅広い年齢層の患者さんに楽しんで頂けたように思います。イルミネーションに対しては「遠くから見ると何を飾っているか分からない。」「もっと豪華な飾り付けにしてほしい。」といった声も以前のアンケートにありましたが、使うことの出来る電力の容量内であれこれ工夫して毎年種類や装飾を増やしているところです。2012年度は12月8日に学生数十名でリハビリ公園にて飾り付けの作業をしました。寒い朝でしたが、みなさん嬉しそうな表情で友達と相談しながら飾り付けをすすめていきました。そして点灯式を迎え、17時に点灯すると、作業した私達も歓声をあげると同時に患者さんに喜んで頂けることを思うと、大変心やかな気持ちになりました。またイルミネーション実施期間中に患者さんを対象としたアン

医学科三年 吉田 裕美

ケートを2012年度も実施しました。患者さんから頂いたご意見を活かして2013年度もより良くイルミたいと思っています。



ナース輝いて オフも充実しています

私は看護師2年目になり、就職時から消化器外科病棟で勤務しています。2年目になると同時に後輩もでき、1年目の時とはまた違う立場で働き、改めて社会人・看護師という責任の大きさを日々感じながら働いています。

休みも勤務の関係で不規則であり、友人との休みが合うことが難しく、なかなか気分転換を図ることができませんが、私は好きなバレーボールを通してリフレッシュしています。

島大病院女子バレー部は看護師13名、事務職員1名、栄養師1名の計15名と様々な職種が集まり週一回の練習を行っています。島根県病院対抗バレーボール大会に昨年より出場しており一昨年は3位、昨年は準優勝という結果を収めることができました。日々の練習では、メンバー全員揃っての練習は難しいのですが、試合当日は気合いとチームワークで勝ち抜くことができました。今年こそは優勝を目指して頑張りたいと思います。

看護部 錦織 千穂



仕事との両立は大変ですが、バレーボールを通して様々な職種の方と知り合うきっかけにもなり、みんなで楽しくバレーボールができることが励みとなり、仕事に対するメリハリも感じつつ、充実感を味わえる点で今後も続けていこうと思います。

島根県病院対抗バレーボール大会に参加して

平成24年11月25日に第78回島根県病院対抗バレーボール大会が行われ、島根大学附属病院からは医師、看護師、ME、検査技師、栄養士、事務職員など様々な職種が集まり、男子チーム8名、女子チーム10名で出場しました。

男子チームは一昨年の予選敗退という苦い結果に奮起し、13チーム中3位に入賞いたしました。男子チームは、得点をあげたプレーでコート中央に皆が集まり「ごめん！ごめん！もおーちょっと・・・」、「すんません！すんません！いやー・・・」、「申し訳ございません・・・」と謝ってばかりのチームで、ちょっと変わった楽しいチームです。

女子チームは大会前まで人数が揃わない厳しい状況でしたが、なんと・・・12チーム中・・・見事・・・準優勝！いたしました。大会最後の試合、女子決勝

会計課 佐々木 敏幸

戦。既に終了したその他のチームも観戦する緊張の中で、ぎっくり腰をしていた錦織キャプテンを中心に、素晴らしい試合を見せてもらいました。

試合終了後の慰労会も最後までベストを尽くして完全燃焼いたしました。

後日、井川病院長に結果を報告した時に、「活気のある病院は、様々な職種の方が集まったクラブ活動が、とても盛んです。これからも頑張ってください！」と言われ、本当にそうだと思います、これからもいろんな部署に声をかけて部員を増やしていきたいと思えます。

今年は今大会の運営当番病院であり準備等で忙しくなりますが、アベック優勝を目指してチーム一丸となって頑張りますので、引き続き応援よろしく願います。



準決勝に挑む男子チーム



得点し中央に集まる男子チーム



準優勝の女子チーム



完全燃焼の慰労会

搾乳でお困りの方はご利用ください！

2010年秋、出雲キャンパスの学部ゾーンとしては初めて臨床研究棟2階（医学部図書館とR I・動物実験施設連絡通路との間）に女性職員用休憩室（兼搾乳・授乳室）が整備されました。この休憩室は女性職員であれば所属・雇用形態にかかわらずどなたでも利用できます。体調不良時に体を休められるようソファベッドや、搾乳した母乳を保管できるよう冷凍冷蔵庫も完備しています。

利用者の方には「子どもが生まれ搾乳目的で使いましたが、このような部屋があり母乳で育てたい私に



女性職員用休憩室

ワークライフバランス支援室

はとても助かりました」との声をいただきました。

しかし、病院ゾーンで勤務される方は、搾乳のために臨床研究棟の職員休憩室まで行くのは遠いと感じられるのではないのでしょうか？そこで、11月からC病棟5～9階の看護師休憩室（夜勤者用）を使用していない時間帯（10:00～17:00）に開放することとなりました！なお、休憩室入室の際には鍵が必要ですので、まずは当該病棟の看護師長（休日はリーダー看護師）に声をおかけください。



C病棟看護師休憩室

「オロチ踊りパレード」に参加しました

10月7日（日）医学部では、「2012夢フェスタinいずも」に協賛した「オロチ踊りパレード」に参加しました。時々小雨の降る天気ではありましたが、沿道のみなさんの暖かい声援を受け、午後3時過ぎに井川病院長、大谷医学部長ほか看護部看護師、事務職員等を中心にした約60名のメンバーが、前日の数時間の練習にも拘らず、華麗にスタートしました。途中のチーム紹介では、平成25年4月の附属病院再開発による病棟フルオープンと看護師大募集のPRのアナウンスも流れ、また、10月13日、14日に開催した出雲キャンパス大学祭「くえびこ祭」の横断幕を掲げてくれた学生達の協

学務課

力もあって、出雲市駅前までのコースを大きな拍手に迎えられながら無事終えることができました。



ボランティア活動について

ボランティアコンサート

医療サービス課 患者サービス室



10月25日 アンサンブル合歓(ねむ)の木の皆さんによる「大正琴演奏会」



11月7日 音楽を贈る会「ドルチェ」による



12月21日 島根大学混声合唱団のみなさんによる「クリスマスコンサート」

病院運営委員会の報告

平成24年10月17日

○外来医長の異動

診療科名等	職名等	新	旧	発令日
歯科口腔外科	外来医長	菅野 貴浩	石橋 浩晃	平成24年10月1日

研修会・講演会・学会等のお知らせ

名称	日時	場所	対象者	演題等	講師名	主催他
医療関係者向け公開講座	平成25年1月10日(木) 18:30~20:00	臨床講義棟 1階 臨床小講堂	医療関係者	「B型肝炎再活性について」 「当院での血液疾患におけるHBV再活性化の現状と対策」	三宅 達也(肝臓内科) 松江赤十字病院 消化器内科 内田 靖	医学部附属病院 (島根県肝疾患診療連携拠点病院)
第1回島根気道アレルギー疾患研究会	平成25年1月10日(木) 19:00~20:50	ニューウェルシティ出雲 2F「百合」	医療関係者	「LAMP法におけるマイコプラズマの迅速診断と増加するマクロライド耐性マイコプラズマ感染症」 「小児急性中耳炎の診療について～診療ガイドラインを中心に～」 「気管支喘息の最新の知見と治療」	竹谷 健(輸血部) 木村 光宏(耳鼻咽喉科) 久留米大学医学部内科学講座 呼吸器・神経・膠原病内科部門 主任教授 星野 友昭	島根気道アレルギー疾患研究会 代表世話人 磯部 威
第2回医療安全のための研修会(必須研修)	平成25年1月16日(水) 18:00~19:30	臨床講義棟 2階 臨床大講堂	全職員	「産科医療補償制度と医療の質の向上」	日本医療機能評価機構 上田 茂	医療安全管理委員会
第11回出雲リハビリテーション研修会	平成25年1月19日(土) 17:45~19:00	出雲医師会館	医療関係者	「リハビリテーションと臨床栄養」	横浜市立大学リハビリテーション科 若林 秀隆	リハビリテーション部

名 称	日 時	場 所	対 象 者	演 題 等	講 師 名	主 催 他
平成24年度第6回館でも参加できる糖尿病教室	平成25年1月21日(月) 18:30~19:30	ラバン (病院2階食堂)	一般市民	年東年輪 崩れかけたコントロールをもどす栄養バランス 糖尿病薬 AtoZ	眞島 昌妙子(薬学治療室) 横谷 育代(薬剤部)	内科学第一
第6回 鳥根感染研修会	平成25年1月25日(金) 19:30~	出雲医師会館	医療従事者	教育講演「実効治療薬の適正使用について〜鎮痛去痰薬・抗真菌薬を中心に」 特別講演「実効ガイドラインにおける感染性疾患の診療」	西村 信弘(薬剤部) 大阪大学大学院医学系研究科 感染制御学 教授 朝野 和典	呼吸器・臨床遺傳学
市民公開講座 〜わかりやすい消化器病シリーズ2012〜	平成25年1月27日(日) 14:00~	パルメイト出雲 4階パルメイトホール	一般市民	飲みすぎ、食べすぎの人が聞く話	古田 賢司(消化器内科)	内科学第二
平成24年度鳥根大学がん医療従事者研修会	平成25年2月8日(金) 18:00~20:00	臨床講義棟 1階 臨床小講堂	医療従事者	「東日本大震災 被災者そしてがん医療従事者から学ぶ〜その時、私たちは何が出来るか〜」	岩手県立大船渡病院 緩和医療科長 村上 雅彦 緩和ケア認定看護師 飯田 彰	看護部
市民公開講座 〜わかりやすい消化器病シリーズ2012〜	平成25年2月10日(日) 14:00~	パルメイト出雲 4階パルメイトホール	一般市民	お腹の症状、こんな時は救急を受診してね!	鳥根県立中央病院 内視鏡科 藤代 浩史	内科学第二
医学部トピ	平成25年2月13日(水) 18:00~19:00	臨床講義棟 2階 臨床大講堂	どなたでも興味のある方	「成人期発達障害の事例と検討」	女田 美彰(精神科神経科)	医学部学務課
公開講座「脂質栄養と健康」第2回「バランスの良い食事で認知症やうつ病を防ごう」	平成25年2月16日(土) 13:30~15:40	津和野町民センター	一般市民	第一部「魚油による認知症予防〜鳥根県疫学調査とヒト介入試験データから〜」 第二部「認知症の予防について」 第三部「脂質異常症にならないやめには」	榎本 達男(三選学講座) 鳥根県立大学 出雲キャンパス副学長 山下 一也 津和野市立病院 院長 須山 信夫	医学部三選学講座
第3回感染対策研修会(必須研修)	平成25年2月18日(月) 18:00~19:00	臨床講義棟 2階 臨床大講堂	全職員	「感染症と社会、生態学的視点から」	長崎大学総合医学研究所 国際保健学分野 教授 山本 太郎	感染対策専門部会
医療安全のための研修会	平成25年2月21日(木) 17:30~19:00	臨床講義棟 2階 臨床大講堂	医療従事者	第一部「病院医学研究成長報告会」 「新しいQOL評価法(SF-8)を用いた作業療法効果の質的研究」 「メディカルスタッフ用マタニティ服の開発」 「小児病棟環境整備による小児入院患者・家族のQOLに与える影響に関する研究」 第二部「医療安全のための研修会」 「MRIの安全と最新情報」	泉陽 繁堂(リハビリテーション部) 津奈 幸志子(解剖学講座) 金井 理恵(小児科) GEヘルスケア・ジャパン株式会社 MRセールス&マーケティング部 営業技術グループ 西日本担当	医療安全管理委員会
名 称	日 時	場 所	対 象 者	演 題 等	講 師 名	主 催 他
POIEXベーシックトライアルセミナー	平成25年3月10日(日) 9:30~14:00	いきいきプラザ鳥根(松江市)	医療従事者	インプラント基礎/システム説明/術式解説/ケースプレゼンテーション	成相 義樹(歯科口腔外科) 管野 貴浩(歯科口腔外科) 恒松 晃司(歯科口腔外科)	歯科
平成24年度第6回館でも参加できる糖尿病教室	平成25年3月11日(月) 15:30~16:30	ラバン (病院2階食堂)	一般市民	あなたの合併症はどのくらい? あなたに伝えたい“足”のこと	野津 雅和(内分泌代謝内科) 和田 加代子(看護部)	内科学第一
市民公開講座 〜わかりやすい消化器病シリーズ2012〜	平成25年3月17日(日) 14:00~	パルメイト出雲 4階パルメイトホール	一般市民	食べ物アレルギーとお腹の病気	木下 芳一(消化器内科)	内科学第二
第9回鳥根感染対策セミナー	平成25年3月23日(土) 13:00~17:00	看護学科1階 N11講義室	医療従事者	洗浄・消毒・滅菌の基本と実践	山口大学医学部附属病院 薬剤部 准教授 尾家 重治	感染対策専門部会
第3回 患者さんと家族のための関節リウマチ勉強会	平成25年3月24日(日) 10:00~11:30	看護学科1階 N11講義室	どなたでも興味のある方	「リウマチの最新治療と、やってみようリウマチ体操」	佐藤 真理子(膠原病内科)	膠原病内科

編集委員会からのお願い

★病院ニュースは年4回発行予定です。

各診療科、各部門、事務部からの投稿をお待ちしております。取り上げてもらいたいニュース、PR、わが家のペットなどを編集委員会へお寄せください。

担当

医療サービス課 医療支援室(内線2068)

Email:しろうさぎ専用アドレスです。 shirousag@med.shimane-u.ac.jp

(病院ニュースは、医学部ホームページの医学部掲示板にも掲載しております。)



特別室のご案内



快適な入院生活をすごしていただくために特別室はいかがですか？
病室は単に治療する場ではなく、生活を送る場でもあります。より日常に近い環境の中でお過ごしいただくために、特別室を用意しています。

◎特別室の利点

- ・プライバシーが保たれ、落ち着いて療養することができます。
- ・面会者の方と、お部屋でゆっくりお話していただけます。
- ・テレビ・冷蔵庫は無料でご利用になれます。



◎個室料金：1日あたり室料（税込み）

特別室A： 12,600円

特別室B： 8,400円

特別室A（緩和ケア病棟）： 6,300円

特別室B（緩和ケア病棟）： 3,150円

特別室C： 5,250円

特別室D（4床室）： 1,575円



広々とした空間でご家族やご友人と大切な時間をお過ごしいただけます。

（基本設備）洗面台、トイレ、テレビ、電子冷蔵庫、クローゼット

特別室A

（その他設備）キッチン、バス、応接セット、テーブル、椅子、（テレビインターネット対応）、冷凍冷蔵庫、インターネット※1



特別室C

（その他設備）テーブル、スツール、（テレビインターネット対応）、インターネット※1



特別室B

（その他設備）シャワー、ソファベッド、（テレビインターネット対応）、インターネット※1



特別室D（4床室）

（その他設備）スツール、（テレビインターネット対応）



※1 インターネットをご使用の場合は接続用の2m以上のLANケーブルが必要となります。各自ご準備願います。
なお、無線LANは使えませんのでご注意ください。

働く、輝く、
出雲で暮らす。



H25年春
病棟改修
完了



島根大学医学部附属病院

看護職員 大募集!

看護師
助産師

インターンシップ

島根大学医学部附属病院に来て、実際に見て・聞いて・感じる、看護体験をしてみませんか。
※プログラムや申込方法などの詳細は、看護部ホームページをご覧ください。

病院見学会・病院説明会《随時》

就職への不安軽減や疑問解消にお役立てください。保護者の方の同伴も可能です。
●お申し込み方法 / 直接、看護部へ電話(0853-20-2478)でお申し込みください。



国立大学法人
島根大学 医学部附属病院

〒693-8501 島根県出雲市堀治町89-1 TEL.0853-23-2111(代表)
<http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>

島根大学病院を入力してクリック!

島根大学病院

検索